

【翻 訳】

ヒックス編『シソーラス (*Thesaurus*)』について

— オックスフォードの書籍製作に関わる考察 — (その1)

J. A. W. ベネット 著

吉見昭徳 訳

「私は今、ドイツの学者連中の名前に目を通しているところです」と、フォリアット (Folliot) 博士は述べ、つづけて「素晴らしい目録の作成ですね！」と言った後「ところで、オックスフォードの学者連中にも検索してみようか。——あれ、何処かな？ 彼らの頭内みたいに空っぽな中庭<sup>(1)</sup>の共鳴も、“あれ、何処かな”と、応答しているぞ」と、博士は言った。1831年では、なるほど、検索するのは大変だったかも知れない。それにおそらく当時はその博士の不満に対する素地はあったようだ。いわゆる良質な用紙に刷られたドイツ版を単に再刷りすること以外に、この大学出版局には学問に対する貢献はなかったのだから。ピーコック (Peacock)<sup>(2)</sup> の愚弄やギボン (Gibbon) の冷笑のことを思い起こすと、もっとそれ以前のオックスフォードの栄光のことをまるで私たちは忘れ去っているのだ。いわゆる、1690年代にシーリア・ファインズ (Celia Fiennes, 1662-1741)<sup>(3)</sup> と居合わせていたり、学者間で用いられていた出版社のことや製作は、あの尊師の称賛をも喚起していたことであろうし、また嘲笑も興っていなかったことだろう。でもすっかり忘れられてしまっていた。(疲れを知らぬ) 精力的なアングリカンのフェル主席司祭<sup>(4)</sup> は、リンカン (Lincoln) の教区司祭 (Rector) のトーマス・マーシャル (Thomas Marshall) からの何らかの援助があったにせよ、出版社の創始者であったわけだし、それにまた当

初からの彼らの目標の一部は、クイーンズ・コレジ (Queen's) の学寮長 (Provost) であるジェラード・ラングベイン (Gerard Langbaine)、辞書編集者 (lexicographer) にしてボードレイ図書館の後援者であったフランシス・ユニウス<sup>(5)</sup> や、それに マーシャル彼自身らによって獲得した活字を使用しているアングロ・サクソンの原文を出版するてはずになっていたのだ。オックスフォードの学者らの続出する世代、——つまりバーナード (Edward Bernard)、ギブソン (Edmund Gibson)、ターナー (Thomas Tanner)、ミル (John Mill) などの世代——の活躍の内に私たちはフランスのボランディストら<sup>(6)</sup> や、ベネディクト会修道士ら<sup>(7)</sup> が、ほとんど単身で中世時代から活躍し続けていたわけだ。しかも サン・モール会士モリスト (Maurist Mabillon)<sup>(8)</sup> の作品におけるあの共同作業の努力を伴うフランスでも豊かな実りを既に生み出すとする精神の気配を (現実)に見始めていたのだから。

主席司祭ヒックス<sup>(9)</sup> の (編纂する) 『シソーラス』 (*Linguarum Veterum Septentrionalium Thesaurus Grammatico-Criticus et Archaeologicus. ...MDCCV* (1705); 以下『シソーラス』とする) は、いわゆるオックスフォード大学の学問やオックスフォードの事業に対する金字塔として *The New English Dictionary*<sup>(10)</sup> それ自体と比べてもそれ程序列の劣ることなき編纂であり、重厚なフォリオ版に比べても明白に注目度の高いこのような共同作業の成果はその頃のイングランドの学問にはどこにも見当たらないのだ。主席司祭のフェル (Fell) は既にヒックス (George Hickes) の知性能力を見抜く最初の人であったわけである。ヒックスは 1665 年にリンカン・カレッジ<sup>(11)</sup> に於いてユニウス (前述, 註(5) 参照; Junius) の出版したアングロ・サクソン語 (Anglo-Saxon) とゴート語 (Gothic) による福音書 (Gospels) のマーシャル (Marshall) の役割部分について知らない訳ではなかった。しかしながらフェルがずっと以前に彼が引き受けるように促していたアングロ・サクソン文法 (Anglo-Saxon Grammar) に既に乗り出したのはアングロ・サクソン憲章など

に豊富な資料のあるウースター (Worcester) 大聖堂の首席司教の公邸担当に1683年彼が任命される迄はなかったのだ。そのことは1689年にその題目となった *Institutiones Grammaticae Anglo-Saxonicae, et Maeso-Gothicae* と、それに1689年に出たシェルドニアン (Sheldonian)<sup>(12)</sup> の奥付け (imprint) と同時に現れることになった。ところが、その翌年の成り行きが意味したものは、ヒックスのような断固たる臣従宣誓拒否者<sup>(13)</sup> にとっては、更なる安寧へのどんな望みも、あるいは身の保護さえも終焉、かなわぬ立場となってしまったのだ。「宮廷風でないゴート語やサクソン語 (Uncourtly Gothic and Saxon)」に対して、〈偏見を抱く妻のことは敢えて掲げなくとも〉、その後の彼のほとんどの人生の内に災難、病氣、貧窮、迫害の内に生き抜いたことを胸に抱かないとするなら、私たちは彼の引き続きなせる業績の偉大さを見逃してしまうのである。彼の同朋の学者連との文通でさえ、数年間に及んで内密にされなければならなかったからだ。ユニウス (Junius) の遺贈したコレクションを始めその手書き本 (MSS) の豊富さを含めて、ヒックスが直ぐにも彼の諸文法論 (Grammers) の改訂なり増補版の作成を開始する上で、オックスフォードは諸計画遂行の絶好の場であった。それにしてもそれらの諸計画に携わった10年間、彼に敵意を抱く者らが攻撃して来て、折角の彼の出版の仕事が邪魔されはしないかと恐れオックスフォードの滞在をもしばらく諦めてしまおうなどと彼はひと時も思いはしなかったが、グロスター・グリーン (Glouster Green)<sup>(14)</sup> に彼が滞在した1697年の2、3週間の間を除けば、ロンドンないしその他の地で彼は仕事の監視・監督をなしていた訳だ。

幸いにして、クイーンズ・コレジ (Queen's) にて講師の職を確立し得たことで、ジョセフ・ウィリアムソン卿 (Joseph Williamson) が1680年に育成し始めていたサクソン研究に大いなる刺激をその機関それ自体与えることになったため、大いなる熱情を込めそれなりに有能なる助手らをヒックスは見出すことが出来た訳である。クイーンズでの最初の講師のウィリアム・ニコルソン

(William Nicolson) は、2年間の後にはカンバランドの牧師の職を求めて巣立ったにせよ、間もなく他の者が代わることになったのだ。世紀の変わる前に、クイーンズからはエドモンド・ギブソン (Edmund Gibson) がやって来た。彼はまだ学士の間にシェルドニアン (Sheldonian) にて『アングロ・サクソン年代記 (*Anglo-Saxon Chronicle*)』<sup>(15)</sup> の注目に足る版を出版していた。そしてポエチウス<sup>(16)</sup> のアルフレッド王訳の編者であるリチャード・ローリンソン (Richard Rawlinson)、それにウイリアム・エルストブ (William Elstob) はオロシウス (Orosius)<sup>(17)</sup> と同等の版を計画しており、彼の研究の方向へ彼の妹のエリザベス (彼女は *Saxon Nymph* の研究者) を誘っており、また、辞書編纂者であるトマス・ベンソン (Thomas Benson)、それに彼の恩師に当たるエドワード・スウェイツ (Edward Thwaites; 彼は (ドイツ) ザクセン (Saxon) では特別研究員 (Fellow) にして個人指導教師 (Praeceptor) を兼ねている) も参加していた。スウェイツは新しい作業における補佐役に適う者としてヒックスによって早くから推薦されていて、間もなく、あらゆる融資関係、印刷に関する詳細 (レイアウトや用紙の供給を含む) の責務を負った。それも彼の不屈の努力、勤勉さ、それに誠実さがために、それ迄に彼が享受し得たそのもの以上の大いなる称賛に値し得たからであった。

ヒックスは他者に対して自身の情熱を伝達するのに非凡なる才に長けていた。その学術書出版機関 (Institutions) が成功した暁にはアングロ・サクソンのテキスト選集も学術書出版機関の同類の書として世に出すことになっていた。彼の友人らによる用意周到なる転写のお陰で、彼がそのような書物を満たすに十分なテキストを調達できたのであるが、しかし彼はそれらを結局、古英語の方言や詩、そしてそれらのその後の発達に関するものを6つの章の範疇へ組み入れていた。それらは彼自身誇らしげに述べている通りにそれ自体がほとんど一つの書物であった。しかも最初に考案されていたように極端にその『シソーラス』の規模もさることながら、すっかりその章を変貌させてしまった訳

でもある。それらの章の中で彼が大量の例証を負っていたのは、オックスフォードに在住していたザクセン人たちやその友人らのお陰によるものなのである。スウェイツ (Thwaites) は『オルムルム』<sup>(18)</sup> より雅量のある選集を作成した。ニコルソン (Nicolson), 今やカーライル (Carlisle) の大執事 (Archdeacon: 主教の次の位) である彼は『ラズワルの十字架 (Ruthwell Cross)』の碑文<sup>(19)</sup> のコピー (複写) を送付していた。エルスタップ (Elstob) は『セルモ・ルピ (*Sermo Lupi*)』<sup>(20)</sup> を転写し、翻訳していた。更に、トーマス・タナー (Thomas Tanner) は、既に女王の前任の従者でもあり、将来のノーリジ (Norwich) の主教区法院の最高責任者 (Chancellor) にもなる彼がノーリジ憲章 (Norwich charter) の原文や『逸楽の国 (*Land of Cocayne*)』を提供してくれていたし、ギブソン (Gibson) は幾つか古英語時代の法律の翻訳をなしていた。ギブソンからは更なる助力をヒックスは期待していたのだが、既に彼は1660年迄にはランベス (Lambeth) 図書館員<sup>(21)</sup> であり、更に彼をロンドンの主教職へ導く手筈は整っており正に昇進への道に沿って早急に階段を駆け上り出し始めている時であった。ヒックスの念願にしていたものが、フランキック (“Francic”) の文法と、マニユスクリプトの詳細な目録を含めた膨大なものへと拡大しており、ユニヴァシティ・コレジ (University College) の大物の学寮長 (Master), アーサー・チャーレット (Arther Charlett) がその出版の舵取りに携わる時迄は決して努力も実を結ぶことはあるまいとギブソンは感じ始めていた。そしてこの件が実現し始める頃迄にはギブソンの活気に満ちた興味も気分も幾分色褪せ出していたのだが、その時には既に (学寮長の) チャーレットはヒックスにハンフリー・ウォンリー (Humphrey Wanley) なる若手の助手を推薦出来ていた。彼 (ハンフリー・ウォンリー) は、間もなく、彼のどの補佐役よりも自ら最も秀でていることを証明することになった。チャーレットは1696年にはこの反物商の見習い (ウォンリーを指す) をボードレイ図書館での小間使いの部所へ斡旋していたのだが、彼はそこ

でイギリスとアイルランドの図書館におけるバーナード編纂の『手書き本目録 (Bernard's *Catalogue of Manuscripts*)』の索引を既に編集する作業に携わり、多忙を極めていた。

(つづく)

\* 本論考は *ENGLISH STUDIES* (John Murray, 1948 London) 誌の第2章 Hickeys's *Thesaurus: A Study in Oxford Book-Production*. By J. A.W. Bennett. からの翻訳である。

### 註

【本稿(その1)に於ける 註(以下)は、すべて翻訳者・吉見による注釈である】

(1) 博士は中庭を指し“Court (*sic.*)”と述べている故に Cambridge 大学の関係者であろうか、Oxford 大学では Quad (Quadrangle の略) を用いるのが通常である。

(2) Thomas Love Peacock (1785-1866) は satirist, essayist それに詩人でもあった。Gibbon については、*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire* (1776-98) の著者 Edward Gibbon (1737-94) と思われるが、不詳。

因みに、16世紀から18世紀初めにかけて、言い換えれば Archbishop Parker や Lawrence Nowell の時代の時代から Hickeys や Wanley の時代にかけて、いわばアングロ・サクソン研究 (Anglo Saxon Scholarship) は全盛期であったと推定できようが、それ以降はこの分野はもっぱらアイスランド人、デンマーク人、ドイツ人らに英国は任しているのは、もはや一般的通念になっている。T. A. Birrell も言うように、アイスランド人学者 Thorkelin (1752-1829) は *Beowulf* を1786年に転写しており、1815年にはそれをラテン語にも翻訳している。更に N. F. S. Grundvig (1783-1872) の場合は1820年に *Beowulf* をデンマーク語に翻訳し、その後 *Exeter Book* を転写するため Exeter Cathedral を訪問している。旅行の折に私もせめて MSS を一目拝みたいと思い立寄ってみたが、そこは Exeter 大学の管理下にありますので、早急に連絡をお取りしますとも言われたが、限られた時間内での行動故、ウインドー越しの確認のみでやむなく諦めざるを得なかった思い出がある。

(3) Celia Fiennes は英国の日記作家：乗馬にてあるいはコーチにてイングランド中をないしスコットランドを旅し、1888年には活気に満ちた旅日誌を *Through England on a Side Saddle in the Time of William and Mary* と題して出版。その中で彼女は街道、宿場街、特に宗教、地方の産業などについても書き残して

いる。

- (4) Fell, John (1625-1686) を指すであろう。彼は 1660 年の Charles II 世の復位 (王政復古: 1660-85) と共に Christ Church Cathedral の Canon (司教座聖堂参事会員) に任命されたが、間もなくそのコレジの Dean (主席司祭) となり、1666 年には Vice-Chancellor (大学副総長)、1576 年には Oxford の Bishop (主教) になった人物。ちなみに、Christ Church の 8 角形の Tom Tower (コレジの塔) から見下ろす Tom Quad (中庭) にはフェルの銅像がある。
- (5) Franciscus Junius (1589-1677) はドイツ、ハイデルブルグで生まれたが、伯爵家の tutor としてイングランドに在住 (1621-51) している。ゴート語、アングロ・サクソン語、ルーン文字など古ゲルマン諸語に関する資料を 1743 年に初めてオランダ・アムステルダムにおいて印刷した。彼はそれらの文献をオックスフォード大学ボドレイ図書館 (Bodleian Library) へ遺贈し、言語学者、古物収集研究家として有名。彼の *The Junius Manuscript* は Krapp, George Philip 編の *The Anglo-Saxon Poetic Records* (Vol. 1), Columbia University Press, New York; Routledge & Kegan Paul, London に収められている。彼 Junius の *Etymological Anticanum* はドクター・ジョンソン (Dr. Johnson) によってもよく使用されたと伝えられる。
- (6) Bollandists と呼ばれるのは、その作業を最初に始めた Jean Bolland の名前に因む。それは 17 世紀初頭より聖人伝と聖人崇拜を研究する学者、文献学者、歴史家らの協会を指してそのように呼ばれている。イエズス会の *Acta Sanctorum* (聖人伝集) はその出版物。
- (7) Benedictines: カトリック、ベネディクト会「修道」士と「修道女」を指し、黒衣を着ているところから、別称 Black Monks とも呼ばれる。
- (8) Maurist はサンモール会士、モーリスト (1618 年フランスに創設されたベネディクト会系) の一員であることを指している。
- (9) George Hickes (1642-1715) はウスター (Worcester) の元主教座聖堂参事会長であったが、国王 (William the 3rd) への臣従の誓いを拒んだと取られ 1690 年に解任される (註(13)を参照)。
- (10) NED (= *New English Dictionary on Historical Principles*) の構想は 1858 年に始まっているが、現在の形態を実際に取り始めるのは J. A. H. Murray が 1878 年に携わるようになってからであった。OED (= *Oxford English Dictionary*) としての初版は 1933 年となる。
- (11) Lincoln College のフェロー特別研究員。ドルドレヒト (Dordrecht) はオランダ南西部 Waal 河畔の都市で、Dordt, Dort とも呼ばれる。1618-19 年に全国教会会議が行なわれた場所として有名。

ヒックス編『シソーラス (*Thesaurus*)』について

- (12) Sheldonian について：Gilbert Sheldon (1598-1677) はオックスフォードの All Souls College の学寮長 (1621-48)、またカンタベリーの大主教 (Archbishop: 1663-1677) を勤めた。1669 年大学総長の時に自費で Sheldonian Theatre を建てて大学へ寄付し、印刷事業関係の多くは Clarendon Building の建てられる 1713 年まで、そこで行われていた。
- (13) Non-Juror：1688 年の名誉革命後、William 3 世王と Mary 2 世によるプロテスタント王共同即位に対し忠誠の誓いを拒んだとして彼はイギリスのアングリカン教会の聖職者約 400 名中の 1 人として数えられ弾圧を受ける (註(9)を参照)。
- (14) グロスター・グリーン (Gloucester Green)：生活しやすく、街並みの中央部は広場で、マーケットもあり市民、観光客のたまり場と言えよう。
- (15) 『アングロ・サクソン年代記』 (*Anglo-Saxon Chronicle*, 初期のキリスト教時代 ~1154) の記録は、アルフレッド大王の興した年代からと伝えられ、現存する MSS は 7 個であるが、C. Plummer は Parker Chronicle; Abingdon Chronicle; Worcester Chronicle; Land Chronicle の 4 グループに分類されるとしている。
- (16) ボエチウス (Anicius Manlius Severinus Boethius, 480?- 524?) は、古代ローマ末期の哲学者だったが、最後は東ゴート王 Theodoric によって処刑される。代表作に「哲学の慰め」 (*De Consolatione Philosophiae*) があり、アルフレッド大王 (Alfred the Great, 849-899) による古英語訳を皮切りに、後にはチョーサー (Geoffrey Chaucer, 1340?-1400) の作品にも与えた影響は大である。
- (17) オロシウス (Paulus Orosius)：5 世紀初期のスペインの歴史家、神学者。パレスティナへ St. Augustine に勧められ赴くが、Pelagius 派に対する反駁で知られる。『異教徒に反論する歴史 (7 巻)』 (*Historiarum adversus paganos libri VII*) は中世時代に広く読まれ、アルフレッド大王による古英語による翻訳もある。
- (18) Ormulum：初期中英語 (12 世紀) にて書かれた約 2 万行の僧オルムによる聖書の注釈本。
- (19) 「ラズワルの十字架 (Ruthwell Cross)」： *Vercelli MS* の中に載せられている *The Dream of the Rood* の詩編の一部分 (15 行程の断片) がこの 8 世紀の建てられたと推定される十字架の縁に、ルーン文字のまま刻まれている。ラルフ W.V. エリオット著、吉見昭徳訳『ルーン文字の探求』 (2009, 春風社) pp.174-86 にはこの十字架に関する詳解がある。また『古英語詩を読む——ルーン詩からベーオウルフへ』 吉見昭徳著 (2008, 春風社) の第 7 章「十字架の夢」 (pp. 135-190) はそれに関する論考である。
- (20) 『セルモ・ルピ (*Serumo Lupi*) ad Anglos』 はヨーク大司教 Wulfstan 2 世



## ヒックス編『シソーラス (*Thesaurus*)』について

(1023年没)により行われた説教集に対して付けられたタイトルで、彼は自分の名前の最初の要素に wolf (「狼」はゲルマン神話において不滅の聖なる動物でとして扱われる) を付けて wulf-stan (=wolf-stone) とした。但し、タイトルはラテン語で、作品自体は古英語 (Old English) によって書かれ、その内容はイギリスの仲間たちの道徳的規律の欠如からそれが「神の怒り」の源となり、長年に渡るイングランドへのバイキング襲来という時期を召喚することになったと説き、特に国王と教会の法律に従って生るべきであると勧告する。テキストには *Sermo Lupi ad Anglos*, edited by Dorothy Whitelock, Methuen's Old English Library, New York. などがある。

蛇足ながら、バイキングの来襲についての期間は第1期 (770-850) ; 第2期 (850-78) ; 第3期 (878-1042) とノルマンの征服 (1066) に至る迄を計算に入れるなら 300 年をそれは越すことになろう。

- (21) ランベス図書館員 (Librarian of Lambeth) : ロンドン南部テムス川付近に位置するカンタベリー大主教の公宅 (Lambeth Palace) 内に付属する図書館の館員を指すであろう。そのこの図書館には『ベオウルフ』 (*Beowulf*, ll.1071-159 a) とも関連の断片詩『フィンズブルグの戦い』 (*Finnsburg Fragment*) が所蔵されていたとされているが、それを Hicke が 1703 年より以前に発見し、転写したと伝えられる。しかしその後の行方は不詳とされる。吉見昭徳訳『古英語叙事詩 (クレーパー第4版, 対訳) 「ベオウルフ」』 (2018, 春風社) の註釈 (245 頁) を参照のこと。

オックスフォード大学留学中にはこの図書館へ畏れ多くも手紙をしたためたところ 1986 年 12 月 30 日の早朝、翌日公宅を訪ねることが出来るかどうかとの Lambeth Palace 女性係官より直接電話を受け、その館内を丁寧に案内し説明を頂いたことは今なお懐かしく思い出される。